

臨地実習における看護技術の教育上の課題 —「環境整備」の学習状況の分析から—

佐々木 真紀子 石井 範子 長谷部 真木子

要 旨

本研究の目的は、看護学生の臨地実習における「環境整備」の学習状況を分析し、臨地実習における看護技術教育の課題を明らかにすることであった。対象は本学3年生72人で、臨地実習が全て終了した後に調査を行った。その結果、「環境整備」はほぼ全員が実行できていた。しかし「環境整備の意義」と「場面」の記述では、1人あたりの記述件数は少なかった。また場面を伴わない抽象的な意義の記述が多かった。学生個々にみると、環境整備を実施しているが、臨地実習で環境整備の意義や場面が意識化される学習の機会が少ないことが推察された。

一方、「環境整備の意義」と「場面」の記述は、それぞれ18カテゴリーに分類された。集団的には、学生は臨地実習で多様な意義を学んでいると考えられた。また記述内容からは、環境整備が対象の看護問題の解決手段として適用されていることが推察された。以上のことから、今後の臨地実習における看護技術の教育上の課題として、学生が学習の機会を意識化できるような意図的な関わり、看護技術教育と臨地実習を担当する教員や実習指導者の緊密な連携、臨地実習の多様な学びの機会を学生個々の学びの機会につなげていくような指導のあり方を検討していく必要性が示唆された。

はじめに

看護技術は、「客観的法則性に基づいた意識的適用である」¹⁾²⁾³⁾と考えられている。また看護技術教育の目標は、看護技術が対象に適した看護実践方法論として確立していくことである。すなわち、看護技術は実践の根拠としての科学的な知識を基盤とし、適用する対象の個別性をとらえながら、対象と技術を提供する自己との相互作用の中で習得されなければならない。看護技術の学習過程は、各看護技術の原理・原則や理論的根拠の学習と、学内演習や臨地実習において、学んだ知識を基盤として様々な健康状態や場の状況にある対象への実際の適用の学習からなる。実際の適用として、学内では模擬的な場面を想定して演習を行うことが主であるが、看護師と対象となる患者を学生間で役割分担して行うなど限定された状況での実施であることから、現実感に乏しく、看護技術の習得には限界

がある。そのため多様な状況にある対象に適した看護技術の習得には、臨地実習における看護技術の学習が特に重要な位置づけを占める。近年は新人看護師の看護技術力の低下が指摘される一方で、質の高い看護実践に対する社会的ニーズの高まりに対応するため、看護技術の教育方法の検討がなされており⁴⁾、臨地実習における看護技術の教育方法の検討は重要かつ急務である。臨地実習における看護技術教育の実証的な先行研究は少ないが、石井ら⁵⁾が「清拭」の実施状況、長谷部ら⁶⁾が「食事の援助」の実施状況の分析から報告し、いずれも看護技術の担当教員や臨地実習で担当する教員と臨床の実習指導者の連携や意図的な関わりの必要性が示唆されている。

そこで本研究では「環境整備」の看護技術に焦点をあて、臨地実習における学習状況の分析から、臨地実習における今後の看護技術教育の課題を明らかにする

ことを目的とした、「環境整備」の看護技術は、対象の生活環境を健康保持、増進に適した条件に整える技術として、全ての対象に必要とされる重要な看護実践活動の一つであることから、今回の調査項目とした。

なお、本調査は秋田大学医療技術短期大学部（以下、本学とする）在籍の3年生に対して、臨地実習全終了後に行った基礎看護技術の学習状況に関する調査の一部として行ったものである。また「環境整備」に関する看護技術は、本学では基礎看護学の基礎看護技術に位置づけられ、1年次前期に講義と学内演習を終了している。その後は基礎看護学実習、成人・老年・母性・小児・在宅の看護学実習において学習が継続されている。

II. 研究方法

1. 対象：研究の主旨に同意した本学看護学科3年生72人

2. 方法：質問紙調査法、調査時期は臨地実習終了時の12月初旬で、一齐回答方式で行った。

質問内容と回答方式は次の通りである。

1) 病床の整備の実施状況とベッド周辺環境の整備の実施状況について、「毎日実施できた」「時々実施できた」「あまりできなかった」の3肢択一とした。

2) 「臨地実習をとおして感じた患者の環境整備の意義とその具体的な場面」については、自由記述とした。

3. 集計・分析方法

1) 病床整備、ベッド周辺の整備の実施状況については、各回答肢ごとに集計し、割合を算出した。

2) 自由記述は、記述内容から「環境整備の意義」と「場面」を抽出し、一要素一内容に分類した後、各学生ごとの記述件数を集計した。分類した記述内容は意味内容別にカテゴリー化を行い、各カテゴリーの命名と記述件数の集計を行った。記述内容については質的に検討した。なお、自由記述内容の分類とカテゴリー化の手続きは、信頼性の確保のため研究者間で一定期間をおいて3回行った。

4. 倫理的配慮

研究の主旨を説明し、同意を得られた学生にのみ調査を依頼した。回答結果は本研究の目的にのみ使用すること、結果の公表にあたっては匿名性を確保すること、および調査協力の有無や回答結果は評価に一切関係しないことを確約した。

III. 結果

配布は72人に行い、回答は71人から得られた。

1. 病床およびベッド周辺の環境整備の実施状況

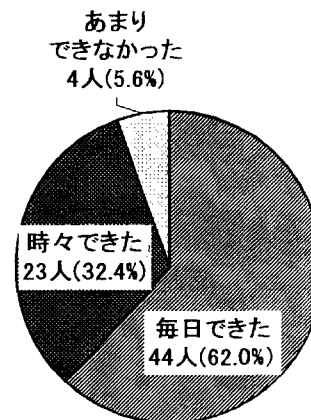


図1. 病床整備の実施状況 N=71

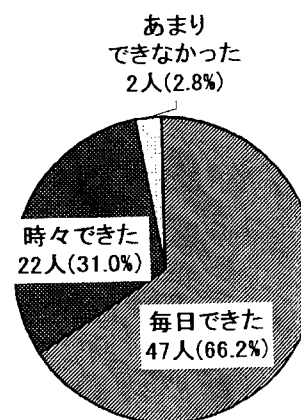


図2. ベッド周辺の環境整備の実施状況 N=71

病床の整備の実施状況は、「毎日できた」が44人(62.0%)、「時々できた」23人(32.4%)、あまりできなかった4人(5.6%)であった(図1)。またベッド周辺の環境整備は「毎日できた」47人(66.2%)、「時々できた」22人(31.0%)、「あまりできなかった」2人(2.8%)であった(図2)。

2. 「環境整備の意義」と「場面」の記述状況

1) 「環境整備の意義」の記述があったものは66人(93.0%)、記述のなかったものは2人(2.8%)、無回答3人(4.2%)であった。1人あたりの記述件数は、1件が最も多く29人(44.0%)、ついで2件26人(39.0%)、3件6人(9.1%)、4件3人(4.5%)、5件2人(3.0%)であった(図3)。

2) 環境整備の意義を感じた「場面」の記述状況では、記述があったものは39人(54.9%)、記述のなかったもの29人(40.9%)、無回答3人(4.2%)であった。記述のあったもののうち、記述件数別では1件36人(92.3%)、2件3人(7.3%)であった(図4)。

3) 「環境整備の意義」と「場面」を共に記述したものは38名(53.5%)、「環境整備の意義」のみの記述

(70)

佐々木真紀子／臨地実習における看護技術の教育上の課題

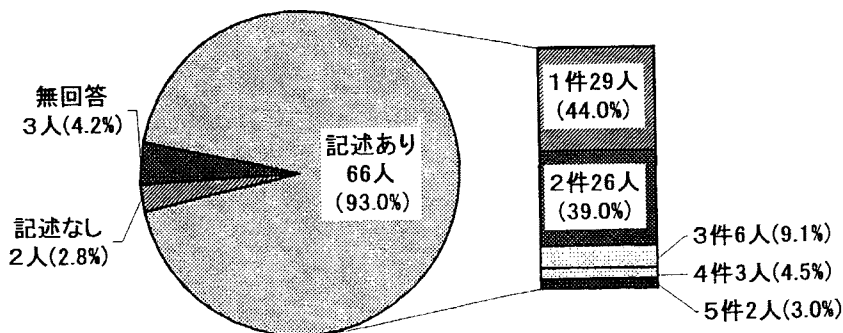


図3. 「環境整備の意義」の記述状況 N=71

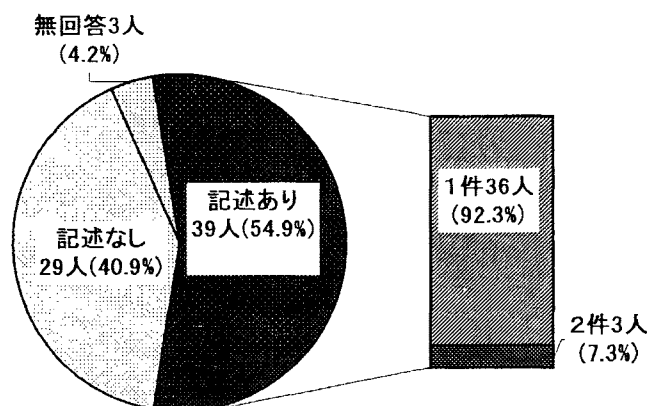


図4. 環境整備の意義を感じた「場面」の記述状況 N=71

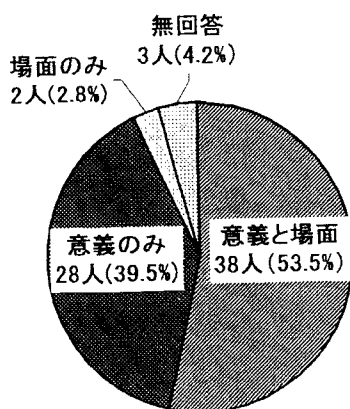


図5. 「環境整備の意義」と「場面」の記述状況 N=71

は28人(39.5%),「場面」のみの記述は2人(2.8%)無回答3人であった(図5)。

3. 「環境整備の意義」の категорияと記述件数, 記述内容

「環境整備の意義」の記述総件数は121件で18のカテゴリに分類された(表1)。カテゴリに含まれる記述件数が多かった順では,【快適な入院生活がおくれる】が16件で最も多く,内容は「リネンが汚れて

いたら交換することで,不快感なく生活を送ることができる」「不自由さやいらいらを感じさせず,落ち着いた入院生活が送れる」「患者が快適な入院生活を送ることができる」などであった。【気持ちをよくする】は14件で,内容は「清潔な環境は精神的にも安らぐと思う」「毎日気持ちよく生活できる」などであった。

【感染の予防】は12件で,内容は「清潔を保ち感染を防ぐ」「不衛生にしない」「感染源を近づけない」などであった。【コミュニケーションの促進】は11件で「ベッドの周辺を整えながらコミュニケーションがとれた」「患者や同室の患者とのコミュニケーションのきっかけになった」などであった。以下【安全を保つ】【患者の意欲・セルフケア能力の高揚】【安楽を図る】【気分転換を図る】【情報収集】【転倒防止】などのカテゴリに分類された。また記述内容では「安全」「安楽」「事故防止」など単語で抽象的な記述にとどまり,場面の記述を伴わないものと,実習場面から経験的に記述されたものがみられた。

4. 「場面」の категорияと記述件数, 記述内容

環境整備の意義を感じた具体的な場面の記述総件数は45件で,18のカテゴリに分類された(表2)。カテゴリに含まれる記述件数が多かった順にみると

表1. 「環境整備の意義」の категорияと記述内容の例

総件数 121件

カテゴリー (含まれる件数)	記述内容の例
快適な入院生活が送れる (16件)	<ul style="list-style-type: none"> ・リネンが汚れていたら交換するなど、不快感なく生活を送ることができる ・不自由さやいらいらを感じさせず、落ち着いた入院生活を送れる ・患者が快適な入院生活を送ることができる ・入院生活を過ごしやすくする ・生活の場がきれいで居心地がよい
気持ちをよくする (14件)	<ul style="list-style-type: none"> ・清潔な環境は精神的にも安らぐと思う ・毎日気持ちよく生活できる ・一瞬でもすっきりした気持ちになれるのではないかと感じた ・患者が気分がよい状況で1日を過ごせる ・「すがすがしい」という声が聞かれた
感染の予防 (12件)	<ul style="list-style-type: none"> ・清潔を保ち、感染を防ぐ ・感染予防 ・不衛生にしない ・清潔な環境の中で生活できる ・感染源を近づけない
コミュニケーションの促進 (11件)	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションをとるのに役立った ・患者や同室の患者とのコミュニケーションのきっかけとなった ・会話のきっかけになった ・同室者の人たちとも話すことができた
安全を保つ (8件)	<ul style="list-style-type: none"> ・患者の安全を守る ・安全 ・安全に過ごしやすいうように保つ
患者の意欲・セルフケア能力の高揚 (8件)	<ul style="list-style-type: none"> ・セルフケア能力 (もしくは意欲) を高めるために効果があった ・患者自身も清潔の意識を高めていた ・患者の病気回復意欲を増す
安楽を図る (7件)	<ul style="list-style-type: none"> ・身体的にも精神的にも患者に安楽を与えることができる ・安楽 ・安楽に過ごせる
気分転換を図る (6件)	<ul style="list-style-type: none"> ・気分的にも良い効果が得られていたと思う ・「心も明るくなる気がする」 ・気分を明るくできるように感じた
情報収集 (6件)	<ul style="list-style-type: none"> ・患者が今どのような環境下で生活しているのか知ることができる ・セルフケアを評価できる場 ・細かいところにも気づく
転倒防止 (6件)	<ul style="list-style-type: none"> ・転倒を防止する ・転倒の危険となるので、環境を整える必要がある
事故防止 (5件)	<ul style="list-style-type: none"> ・事故防止 ・危険の防止
患者に喜びをもたらす (5件)	<ul style="list-style-type: none"> ・「きれいだね」と患者に喜んでもらった ・「すごくよかった」という声がきかれた
入院生活にメリハリをつける (3件)	<ul style="list-style-type: none"> ・入院生活にメリハリをつける ・一日の始まりを感じる
二次障害の予防 (3件)	<ul style="list-style-type: none"> ・二次的な障害を起こさない ・褥創が予防できる
回復の促進 (3件)	<ul style="list-style-type: none"> ・患者の心身の回復を促す ・治療に専念でき回復も早まる
換気を図る (3件)	<ul style="list-style-type: none"> ・「咳がでる」という訴えが、環境整備後には聞かれなかった ・清浄な空気を吸える
信頼関係の形成 (3件)	<ul style="list-style-type: none"> ・面会にきた家族も安心して入院させておけるという声が聞かれた ・信頼関係を築きやすくなった
その他 (2件)	<ul style="list-style-type: none"> ・一人の人間として尊重すること

表2. 環境整備の意義を感じた「場面」のカテゴリーと記述内容の例

総件数 45件

カテゴリー (含まれる件数)	記述内容の例
患者や家族との会話場面 (6件)	<ul style="list-style-type: none"> ・面会にきた家族も安心して入院させておけるということが聴けた ・患者から「自分でなかなか行き届かないところもやってくれてうれしい、きれいにしてもらおうとすがすがしい」という声が聞かれた ・患者が気持ちが良いと言ってくれたことや面会(家族)の人がきれいになって喜んでた
歩行が困難な患者 (4件)	<ul style="list-style-type: none"> ・床が汚れていたり、障害物があると転倒の危険があり周辺を整える必要があった ・肺癌による骨転移で頭痛があり歩行が困難だった
症状安静の患者 (3件)	<ul style="list-style-type: none"> ・一日中ベッド上安静の患者は、テレビや床頭台のホコリが必要以上に気になり、「咳がでる」という訴えがあった ・ベッド上でほとんど1日を過ごしている患者さんであり、皮膚の落屑が多かった
杖・車椅子など使用中の患者 (3件)	<ul style="list-style-type: none"> ・片麻痺で杖や車椅子を使用している患者を受け持ったとき、ベッド周辺の環境を整えておくと、移動がスムーズであった ・歩行器を使用の患者は手の届く位置に置き、使用しやすい状態にした
動くことが困難な患者 (3件)	<ul style="list-style-type: none"> ・体が思うように動かさない患者 ・動くことが少し困難な方で、ベッド周囲の環境を整え、転倒などに気をつけなければならなかった
血液疾患の患者 (3件)	<ul style="list-style-type: none"> ・白血病患者を受け持った際
呼吸器疾患の患者 (3件)	<ul style="list-style-type: none"> ・呼吸器に障害がある方を受け持ったとき
免疫機能低下の患者 (2件)	<ul style="list-style-type: none"> ・免疫が低下している患者などを受け持ったとき
麻痺のある患者 (2件)	<ul style="list-style-type: none"> ・機能障害(麻痺のある患者など)のある患者 ・片麻痺のある患者の場合
体動が制限される患者 (2件)	<ul style="list-style-type: none"> ・体動制限のある患者は自分で思うように必要な物に手が届かなかったり、自分で思うように整備ができなかったため
パーキンソン氏病の患者 (2件)	<ul style="list-style-type: none"> ・パーキンソン病の患者さんは、特に動作の範囲が限られていた
人工股関節置換術後の患者 (2件)	<ul style="list-style-type: none"> ・人工股関節置換術を行った患者
ポータブルトイレ使用の患者 (1件)	<ul style="list-style-type: none"> ・ポータブルトイレ使用中の患者
高齢の患者 (1件)	<ul style="list-style-type: none"> ・80歳の高齢患者を受け持ったとき
具合が悪い患者 (1件)	<ul style="list-style-type: none"> ・きれいにしたくても具合が悪くできない人
視力障害のある患者 (1件)	<ul style="list-style-type: none"> ・視力が低い方や、白内障の方などは周囲がよく見えない
入院生活の長い患者 (1件)	<ul style="list-style-type: none"> ・長い入院生活の患者とベッドの周りを片づけたことがあった
その他 (5件)	<ul style="list-style-type: none"> ・ネブライザーの蛇腹を床につけないよう注意したり、排液バッグも同様に毎回チェックした

【患者や家族との会話の場面】が6件で最も多く、内容は「環境整備を行ったことで患者や家族から安心して入院させておける」、「きれいになって嬉しいと喜んでくれた」などであった。

【歩行が困難な患者】のケア場面は4件で、内容は「床が汚れていたり、障害物があると転倒の危険があり周辺を整える必要があった」などであった。【杖・車椅子など使用している患者】のケア場面は3件で、内容は「ベッド周辺の環境を整えておくと、移動がスムーズであった」などであった。その他【床上安静の

患者】のケア場面では、「テレビや床頭台の埃が気になり、咳が出ると訴えがあったが、環境整備後なくなった」、【動くことが困難な患者】のケア場面では、「ベッド周辺をきれいに整え、転倒防止に気をつける必要があった」、などがあげられていた。

その他【血液疾患の患者】や【呼吸器疾患の患者】などの疾患をもつ患者を受け持った場面や【体動が制限される患者】【麻痺のある患者】【免疫機能低下の患者】などの受け持ち患者の状態を記述したものに分類された。

IV. 考 察

1. 「環境整備」の実施状況と「環境整備の意義」「場面」の記述状況

病床の整備やベッド周辺の整備が適切に毎日できた、時々できた学生は90%以上であり、ほぼ全員の学生が環境整備の看護技術を臨地実習で経験していた。しかし約半数の学生に環境整備の意義を感じた「場面」の記述がないことや、記述した学生でも件数は1人あたり1～2件と少なかったことから、環境整備の意義が意識化されるような印象に残る場面が少なかったことが考えられる。

学んだ原理・原則やそれらの理論的根拠が、実際の看護実践でどのように適用されるかを認識できて初めて理論の実践的適用としての看護技術の習得に至ると考えられる。「環境整備」の看護技術の習得を促すためには、臨地実習の場で、これらの意義を対象のニーズと関連させ、意識的にその方法を適用することが必要である。そのために、教員や実習指導者は学習の機会を適切にとらえて、学生の意識を喚起するような意図的な関わりがさらに必要である。

また臨床における看護師は、教師と共に学生にとってロールモデルとして重要な位置づけにある。近年の臨床における環境整備を取り巻く状況は、寝具やリネンのリース化、定期的なシーツ交換やベッド周辺の掃除の業者委託が進むなど変化しており⁷⁾、看護師の関わりが変化していることが学生の環境整備の実施状況や意義の認識に影響を与えていることも考えられる。実習環境の変化も視野に入れ、臨地実習の場でどのように環境整備の意義や方法に対する学習場を整えるかも検討していくことが必要である。

2. 「環境整備の意義」と「場面」の категория と記述内容

「環境整備の意義」や「場面」の категория はそれぞれ18に分類されたことから、集団的にみると学生は「環境整備の意義」や「場面」について多様に学んでいると考えられる。これらの学びが、学生個々の学びにつながるように教員の意図的な関わりがさらに必要である。

記述内容では「環境整備の意義」は抽象的なものも多かった。これは1年次に学内で学習した環境整備の意義を想起して答えたものと推察され、「環境整備の意義」に対する学生の認識は、学内学習の知識と臨地実習から経験的に学んだものが混在していると考えられる。看護技術は学内での学習が基盤となっており、看護技術の学習の過程は、「理論から実践、実践から理論へ」といった方法を原理としてすすめられなければならない⁸⁾とされる。これを十分にふまえ、学内学

習が臨地実習と有機的に関連するよう、看護技術の担当教員と臨地実習に関わる教員や実習指導者が密接に連携し、抽象的な理解が実践に適用できる具体的な知識や技術として習得できるように取り組むことが必要である。

また臨地実習の経験に基づく「場面」の記述は少なかったが、その内容には活動性が障害された患者のケア場面や、易感染状態にある患者のケアの場面などがあげられていた。L.C.Mion⁹⁾は「環境整備」が対象の看護問題解決のための方法として活用されること、またその看護問題として「気分転換活動の不足」「身体運動性の障害」「感染のハイリスク状態」など18項目を示しているが、抽出された「場面」はこれに共通するものが多かった。このことは、「環境整備」が臨地実習において患者の看護問題解決の方法として適用されていることの現れと考えられる。臨地実習におけるこれらの多様な学習の機会をとらえ、より多くの学生が「環境整備」の看護技術を対象に適した看護の実践方法として確立していくよう指導にあたることが必要である。

V. 結 論

1. 「環境整備」は、ほぼ全員が経験できていたが、1人あたりの「環境整備の意義」や「場面」の記述は少なく、場面の記述を伴わない意義の記述、抽象的な記述も多かった。これらから「環境整備」の経験はしているが、意識化される学習の機会は少なかったことが推察された。

2. 「環境整備の意義」「場面」の記述内容は、それぞれ18の category に分類され、集団的には多様に学んでいた。また「環境整備」の看護技術が対象の看護問題解決の方法として適用できていることが考えられた。

3. 臨地実習における「環境整備」の学習状況の分析から、本学の臨地実習における看護技術教育上の課題として、1) 実習環境の変化も視野に入れながら、学生が学習の機会を意識化できるように意図的に関わること、2) 看護技術の担当教員と臨地実習の担当教員、および実習指導者が緊密に連携し、学内学習と臨地実習の学びが有機的に関連するよう努めること、3) 臨地実習の多様な学びの機会を、学生個々の学びの機会につなげていくような指導のあり方を検討していく必要性が示唆された。

おわりに

本研究の限界は「環境整備」の一看護技術に焦点を絞って臨地実習における看護技術教育上の課題を検討したことである。なお、本研究で明らかになった課題

は、学内での看護技術教育に反映されなければならない。今後は学内における看護技術教育の授業方法論や臨地実習との連携のあり方を具体的に検討していきたい。

なお本研究の要旨は、第21回日本看護科学学会において発表した。

稿を終えるにあたり、調査にご協力いただいた皆様に深謝いたします。

文 献

- 1) 坂本賢三：技術概念を問い直す。看護技術論，メヂカルフレンド社，1980，pp80-83
- 2) 阿曾洋子：看護技術教育と臨床実習の変化。看護教育，36(8)：662-667，1995
- 3) 川島みどり：今求められる基礎看護教育の質。看護教育，38(11)：874-886，1997
- 4) 看護学教育の在り方に関する検討会報告：大学における看護実践応力の育成に向けて，文部科学省。（オンライン），入手先
- 5) 石井範子，長谷部真木子・他：基礎看護技術教育のあり方に関する検討－臨地実習における「清拭」の実施状況の分析から－。秋田大学医短紀要10：103-111，2002
- 6) 長谷部真木子，石井範子・他：臨地実習における「食事の援助」実施状況と教育方法に関する検討。秋田大学医短紀要10：132-138，2002
- 7) 朝比奈佳代，芳賀佐和子・他：臨床におけるベッドメイキングの現状と問題点。臨床看護，22(2)：268-275，2002
- 8) L.C.Mion. 著，G.M.BULECHEK，J.C.McCLOSKEY 編，早川和生監訳：環境整備ナーシングインターベンション看護診断にもとづく看護治療。医学書院，1995，pp232-241
- 9) 外間邦江：看護技術の教育に関する今日の問題と課題。看護技術論，メヂカルフレンド社，1980，pp349-361

A Study of Nursing Skills Education in Clinical Practice － Analysis of Administration of Environmental Structuring －

Makiko SASAKI Noriko ISHII Makiko HASEBE

Course of Nursing, School of Health Sciences, Akita University

The purpose of this research was to analyze the situation of "environmental structuring" in student nurses' clinical practice, and to clarify problems relating to nursing skills education in clinical practice. The subjects were 72 third years in nursing college, and the investigation was conducted after all clinical practice was completed. Consequently, all members were able to realize environmental structuring.

However, each individual had few descriptions of "the significance of environmental structuring" or of "situation". Moreover, there was much abstract description unrelated to situation, and little description of situation taking each student individually, they were able to carry out environmental structuring, but there were few study opportunities for them to become conscious of the meaning of environmental structuring, or of situation. Although "meaning of environmental structuring" and description of "situation" were classified into 18 categories, respectively, it is thought that students learnt diverse meanings throughout their clinical practice. Moreover, the contents of descriptions suggest that environmental structuring is applied as a way of resolving nursing problems.

As a future issue for nursing training during clinical practice, it is suggested that it is necessary to plan training where students can become conscious of learning opportunities, the faculties and clinical instructors can work in close cooperation, and students can have the opportunity for a wide range of learning during clinical practice.